

# 介護サービス 地域に開放

## 老後の住まい

今年9月、川崎市にオープンしたサービス付き高齢者向け住宅「エイジフリーハウス川崎登戸」(20室)の1階には、小規模多機能型住宅介護(定員25人)の事業所がある。

小規模多機能型住宅介護 通い(デイサービス)、訪問(ホームヘルプ)、宿泊(ショートステイ)を一つの事業所が提供する介護保険のサービス。介護の必要な高齢者が自宅や地域での暮らしを継続できるように支えることが目標。2006年に始まったが、今年4月現在、全国に4728事業所と少ない。



小規模多機能型住宅介護「ぶどうの家」は、昔ながらの民家のような造り。お年寄りも顔なじみの職員とくつろいでいる(岡山県倉敷市で)

放されている。

現在の小規模多機能型住宅介護の利用者5人のうち、1人は入居者ではない地域住民。宿泊(ショートステイ)用の5部屋も、地域住民の利用を見込んでいます。

国土交通省は、地域住民を対象とする介護事業所を併設したサービス付き高齢者向け住宅を、「拠点型サ高住」と位置づける。今後、支援措置を充実させていく方針だ。

「エイジフリーハウス」

はその構想の先駆けと言える。運営する「パナソニック コムハート」(大阪府門真市)では、同様のサービス付き高齢者向け住宅を17か所で展開しており、2018年度までに関東、近畿、中京圏を中心に150か所を整備する方針。

「小規模多機能型住宅介

護は、利用料が要介護度ごとの定額で、24時間365日の利用が可能。利用者にとって一番いいサービスだと思う。多くの人が知ってもらいたい」と同社の森田浩一常務。

老後の住み替えによ

### 「通い」や「宿泊」事業所を併設

て、環境の変化による心身への悪影響(リロケーションダメージ)が生じる可能性もある。引越先の高齢者住宅に顔なじみがいれば影響は少ない。

岡山県倉敷市の「ぶどうの家」。小規模多機能型住宅介護(定員24人)を通じて地域との関係を深め、2012年にサービス付き高齢者向け住宅(定員26人)を併設した。

81歳の男性は、これまで「ぶどうの家」の小規模多機能型住宅介護を利用しながら、自宅で寝たきりの妹

の介護を続けてきた。しかし、体調を崩し、生活が成り立たなくなったため6月、サービス付き高齢者向け住宅に引っ越した。妹も隣室に越してきた。

約10畳の和室に、仏壇、冷蔵庫、それにソファもある。職員が自宅から運んでくれた。「お気に入りのソファだったんです。ここに住み心地がいいですよ」と男性は話す。男性は今も、小規模多機能型住宅介護の「通い」と「訪問」を利用している。

「自宅から移り住んでも、顔なじみの介護職員がいることで、今までの暮らしが継続できている」と代表の津田由起子さん。

「ここでの暮らしに慣れ、高齢者向け住宅の職員ともなじみの関係ができれば、いずれ小規模多機能型住宅

に位置づけられる。これからは、地域住民と日頃から関係を持ち、「自宅で暮らせなくなったら、ここで暮らしたい」と思わせるような「開かれたホーム」が望まれている。

(編集委員 斎藤雄介)